

1. 児童養護施設（ベトレヘム学園）の運営

【定員】

定員 56 名（本園 50 名、地域小規模 6 名）

【年間利用状況】（月初在籍人員）＜地域小規模＞

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
未就学	10	9	10	11	13	13	13	13	13	13	13	13	144
小学生	18 <1>	17 <1>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	18 <2>	17 <2>	17 <2>	213 <22>
中学生	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <4>	5 <3>	5 <3>	5 <3>	60 <45>
高校生	12 <0>	13 <0>	13 <0>	13 <0>	13 <0>	13 <0>	13 <0>	13 <0>	14 <0>	14 <0>	14 <0>	14 <0>	159 <0>
措置延長	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
停止	1	0	0	0	0	0	0	0	0	<1>	<1>	0	1<2>
合計	47 <5>	45 <5>	47 <6>	47 <6>	49 <6>	49 <6>	49 <6>	49 <6>	50 <6>	50 <6>	49 <6>	49 <5>	580 <69>

【施設運営状況】

- ・施設長・副施設長が交代したことで、運営方針等を再確認するとともに、職員に対しては改めて「子どもたちの最善の利益」が最重要項目であることを伝え、権利擁護について、昨年に引き続き職員会議で時間を取り、職員の意識向上に努めた。
- ・専門機能強化型施設の交付決定を平成 28 年度も受け、引き続き 5 名の医師と外部スーパーバイザーから多角的な助言をいただき、課題の多い子どもたちのケアに当たったが、子どもの特性から来る事故が多発した年となってしまった（前年度比で約 5 倍増）。原因として考えられることは、新任職員が 7 名と多かったこと、課題が特に多い児童の状態が悪化してしまったこと等が考えられる。再発防止のために、担当職員や心理職等専門職の他、施設長以下運営管理層職員も協力して対応に当たった。
- ・ストレスチェックの導入により、ストレスが掛かっていると思われる職員には看護師から産業医の面接を進めるなどして、職員のメンタルヘルスケアに努めた。
- ・卒園児のアフターケアは、自立支援コーディネーターが専任化したことにより、就労支援や役所等での手続きの付き添い、NPO 法人等関係機関との連携等、より細かい対応をすることが出来た。

【利用者支援状況】

- ・入所 4/13 高 2 女 5/17 年長男 5/23 小 4 女 6/6 年長女 7/14 3 歳女 2 歳男
11/29 高 1 女 3/28 2 歳男 3/29 2 歳男 3/30 中 3 男

- ・退所 措置停止解除(家庭復帰) 4/20 3歳女 4/27 小3女
措置延長解除 6/30 18歳女 里親委託 1/28 小2女
措置変更 2/27 中1女 家庭復帰 3/15 年長男 3/31 高1女
自立 3/16 18歳男 3/17 18歳男 3/30 18歳男
- ・措置延長 就職した18歳女は住居が決まらず6/30まで措置延長となる。

【地域との連携】

- ・社会福祉法の改正により、地域における公益的な取組みが責務化されたことを受け、地域支援がますます重要な課題となった。今年度も昨年に続いて東京都共同募金清瀬地区協力会や要保護児童対策地域協議会への委員として参画する他、社会福祉法人地域貢献協議会では幹事として携わり、地域連携に向けて市内の社会福祉法人で協力体制を作っていく活動にも参画した。
- ・清瀬市の市内一斉清掃や赤い羽根共同募金活動等の地域活動も歳末助け合いの街頭募金、白梅自治会と共催の納涼祭・合同防災訓練等、これまでの活動は継続して行われた。
- ・恒例の11月3日“慈生会清瀬地区ふれあいバザー”は今年度も好天に恵まれ盛大に行われたが、来年度は現園舎での最後の「どんぐり祭」となり、どんな形での開催になるか、卒園生の里帰りの機会ともなっているため、検討を要する。

【職員の質の向上】

- ・職員の正規採用は7名（保育士・指導員6名、心理職1名）で、内1名は他児童福祉施設経験者。直接処遇職員の平均年齢は29歳であるが、副主任を除くと20代の職員が半数以上である。
- ・平成28年度末での職員の退職は、第2子出産に伴い継続が難しくなった保育士1名に留まり、現場の中核を担う中堅職員が順調に育っていて、将来に期待が持てる。

【施設・設備整備】

- ・新園舎新築に関して、10月26日に秋津教会天本神父様司式による起工式を行い、11月1日に着工した。平成29年12月には引越しをする予定である。

(単位：千円)

工 事 (修繕・修理を含む)		備品購入	
件 名 (時 期)	金 額	件 名 (時 期)	金 額
100万円以上の工事は無		すずらんホーム風呂釜	270

注：工事は1件100万円以上、物品購入等は1件10万

【平成 28 年度福祉サービス第三者評価講評】

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	法人理念を踏まえ施設独自に「ベトレヘム学園のヴィジョン・ミッション」を策定し、職員の共通認識のもとでの養育実践を目指している。
	内容	法人の理念「いのちを慈しむ～慈生会の誓い」を踏まえ、児童養護施設として今後の養育における目的や職員の行動規範になるものとして「ベトレヘム学園のヴィジョン・ミッション」を新たに策定している。策定にあたっては、導入の段階で全職員が関わり、その後、多職種・経験を積んだ職員等の代表者による協議を重ね、施設外部からの助言を受けて完成に至っている。この「ベトレヘム学園のヴィジョン・ミッション」をもとに、専門職と各ホーム職員との一体感を深め、施設が目指す養育の実践を図れるよう、組織体制も含めた整備をすすめている。
2	タイトル	FSW(家庭支援専門相談員)を複数配置して児童相談所や保護者、関係機関等との連絡調整を円滑にすすめソーシャルワークを展開している。
	内容	施設は、子どもの意向を踏まえた自立支援計画書の作成に向け、各ホームのチームミーティングには、FSW・心理士・看護師・栄養士・自立支援コーディネーター・里親支援専門相談員等専門職が関わり、ホームの職員と検討し、ホーム内では解決が難しい課題を専門的な見地から、アドバイスしている。FSW は児童相談所や保護者、関係機関等との連絡調整を円滑にすすめるために5名で分担するとともに、FSW・里親支援専門相談員・自立支援コーディネーターが施設全体の自立支援の推進を図り、ソーシャルワークを展開している。
3	タイトル	地域の関係機関等とのネットワークによって築いた人脈をいかし子どもの生活や進路支援の充実が図られている
	内容	昨年度より市や社会福祉協議会、他施設等がネットワークを構築し、その協働による地域の子どもの対象にした「居場所作り」の活動を開始しており、年3～4回開催する会議には自立支援コーディネーターが参加している。また、活動の一つに無料塾として学習支援が行われ、施設内の学習室を提供している。そうした活動には施設の子どもも参加して、他施設の職員や地域住民との交流を図っている。さらに、そこで築いた人脈を通して、子どもが進学や就職の情報を得やすくなる等、日常生活や進路の充実が図られている。
更なる改善が望まれる点		
1	タイトル	キャリアパスを活用して、人事考課制度や賃金制度の検討に着手されるよう期待したい。
	内容	施設における人事管理制度の基幹となるキャリアパスは6段階のステップに分かれて、それぞれの定義がなされている。また、キャリアステップとは別に11種類の専門職員が定義され、キャリアパスの中に組み込まれた制度とな

		っている。一方で、キャリアパスにおいてステップ間の昇格・降格ルールは明確になっておらず、客観的判断材料が少ないため公平・公正な処遇が難しくなっている。職員のモチベーションの向上のためにも、人事考課制度による評価の導入や、それに伴う資格及び職務手当等と連動した賃金制度の検討に着手されるよう期待したい。
2	タイトル	「権利」を守ることにについて、子どもが当たり前のものとして受け入れ、自分たちの力でより良い生活環境づくりが図られるよう支援されたい。
	内容	権利擁護委員会を中心にヒヤリハット・事故報告書の検証、園内研修やチェックリストの実施等により、職員の権利擁護への意識浸透を図っている。一方、子ども間のトラブル時の職員対応への不信は継続しており、自分の権利、他者の権利を守ることの大切さが子どもに十分伝わっていない状況もうかがえる。自己肯定感を育みにくい養育環境を経て今に居たる子どもにとって「権利」が自分に保障される当たり前のものとして受け入れられるよう、子ども間で「権利」を話し合う場づくりも視野に入れ、子どもの有する力を信じ、自立への支援として取組まれたい。
3	タイトル	子どもの愛着形成に役立つ仕組みとして「スペシャルタイム」をより有効に機能させていくための方策を検討されたい。
	内容	小学生以下の、特に幼児の割合が高いことを特徴とする施設では、幼児期の愛着形成の重要性を認識するとともに日常的に個人の主張を通しにくい集団生活に鑑み、職員と1対1で関われる「スペシャルタイム」を設け、外出や子どもが大人と一緒にやってみたいことを行っている。そのあり方については、総括の中で改善を要する声が複数挙げられていることから、導入した理由等、この仕組みの根拠となる事柄を職員が再確認し、現状と照らし合わせて検証を行い、子どもの愛着形成に役立つしくみとして、より有効に機能させていくための方策を検討されたい。